

野球券

ペ・え・ふ・と



「それじや、かんぱりい！」

並々に注がれたビールジョッキから、かち合う音。

ドクターが仕事を終えた後の密かな楽しみ。

それは秘書であり親友でもあるバグパイプとの二人きりの飲み会だ。

場所は彼の殺風景な自室。

談笑に邪魔が入る心配も無い。

ラストオーダーの時間に気をかけたり、酔いすぎて帰路を心配する事も無い。

わざとらしく喉を鳴らしながら

「ぷつぱあ～！やつぱり美味いべ！」

と満足そうに笑う。

『疲れた頭をとことん休ませる様に、と本能が言っているのだ！』

と言わんばかりに、予め買い込んでおいた麦の海に一人はとことん泳いでいる。

盛り上がりしていく会話。

「そうそう！でもあれって結構大変じやない？」

酒が入れば尚更だ。

そうして楽しい時間はあつという間に過ぎてゆく。

「さて、宴もたけなわになつてきたね～、あ、宴で思い出したべ」

ふと立ち上がるバグパイプ。

「ウタゲちゃんから、ある遊びを教えてもらつたんだけど、うちとドクターでやつてみない？」



馴熟落で思い出したのか……と、ドクターは苦笑い。

（しかし、そのゲームがどんなものなのかは気になる）

と考えた彼はどのような遊びをするのかを聞いてみた。

「えーっとね、極東にはヤキュウケンっていうのがあってドクター知ってる？」

その瞬間、ごほごほと強く咳き込むドクター。

「だ、大丈夫！？ドクター！」

彼は首を縦に振り、体調不良では無い事を説明した。

まさか彼女から野球拳などという単語が出るとは。

名前だけを知ってる可能性に賭け、ルールを聞いてみたが、

「歌いながら踊って、じやんけんして負けた方が脱ぐって遊びだけど」と言われ、その可能性も無くなつた。

流石に服を脱ぐのはまずいと断る彼に、

「うちとドクターの仲だし、それぐらい全然いいよ！」

とバグパイプからの押しの一手。

もし野球拳するとしてどこまで脱ぐんだと呆れつも聞くと、

「もちろん、すっぽんぼんになるまで！いや、裸になつても、もっかいだけ勝負しよ！」

と更なる一手。

「うち、ドクターのちんちんが見たいべ！」

と普段の彼女ではとても想像のつかない変態発言をしながら、顔を近づけるダメ押し。

甘い香りがふわりと漂い、ドクターの鼻腔をくすぐる。

ドクターは、こりや相當に酔っぱらつてゐるな、と呆れながら考える。